

























初めまして、ライカさん。
本日の撮影、よろしくお願いします。

SMグッズの試着モデルの撮影でしたよね？
準備できています、どうぞ



んっ・・・くふっ。
ん、んっ

ああ、いいですね お美しい
そのままのポーズでいて下さい。。



それでは次の撮影を行います。
ちよつと苦しいでしょうけど
頑張つて下さいね。

……っごー！
んごおおー！？



んっ・・・ふう、ふう
おおお・・・んふう！

ハッ
ハッ

ウウウウウウ

ジッ
⚡

そう、その顔です！

醜い絶頂を耐え忍ぶその姿！

もっと、もっと耐え悶えて下さい



もう限界ですか？

いいですよ、**イッて下さい**

醜く惨めに大声で啼いて下さい！

み、見ら・・聞かない・・れ！

[illegible]

お疲れ様です、お陰でいい絵が撮れました
来週には動画で掲載するのでご覧下さい

ひやひやひや



















地下クラブの薄暗い一室。

現在使用中であるこの部屋の扉には

以下のようなプレートが飾られている。

—使用中—

MISTRESS ミストレス・レイナ

SLAVE 隷奴・ライカ



—ずしっ—

「ん、んぐう……!」

「うふふ、貴女のために用意した衣装
気に入ってくれたかしら？」

とっても似合ってるわよ、下品で淫乱
な貴女を曝け出すにはピッタリね



「ほおら、お啼きなさい」

—ビシイ!—

「ンオ! ヴオオオ!」

「アハハハハ! まるで豚みたいな悲鳴

もう鞭だけで三回イッてるものね

そろそろお尻の皮がめくれて使い物に

ならなくなるんじゃないかと?」



「ふふ、アイマスクを取ってあげる
自分の惨めな姿をよくご覧なさい」
「んっ・・・ふう、ふう・・・んっ」
「いいわよ・・・反抗的なようで次にどんな
酷いことされるか期待しているその目、
とっても魅力的だわ」



「んはあ！はあ・・・お姉様・・・」

「さあ、これからもつと酷いこととして

遊びましょう。今夜の貴女は牝奴隷。

女王様から堕ちた淫乱で変態な牝豚。

鞭でイッちゃうような変態牝豚には

お仕置きが必要よね・・・？















「やだぁ・・・何あれ。
すごい格好・・・
な、何かの撮影かなあ」

「たぶん・・・でも顔は見え
ないし、手綱で繋がれて
てるし・・・」

「ちよつと怖い・・・
早く行こうよ、ねえ」



シュウウ・・・スコオオ

「やだ、あの人。」

脱いでるわよ・・・!

やだぁ・・・!」

「おい、警察呼んだ方が
いいんじゃないか?」



カチャ・・・カチャ・・・

「凄い・・・丸見えだ」

「ちよつと、いつまで見てるのよ、もう行こう
いい所知ってるから」
「ん、あ、ああ・・・」



「んふ、さっきの男の方
貴女を食い入るように見
てたわよ、良かったわね」
カチャ・・・
「ん、んん・・・」
「あら・・・なんて我慢ので
きない牝豚・・・ふふっ
着いたらお仕置きね」











フフフ・クスクスッ・・・
会員制SMクラブの薄暗いメインホール。

ライトアップされたその中央にライカの姿があった。

姿こそかつての女王様であった時に着たラバードレス
だったが、ポールを背にがに股になったその姿はむしろ
欲情のままに誘う淫乱な牝のようにも見える。

—アハハ、何あのポーズ、誘ってるの？やーらしい—

—あのライカ女王様がこんなドM女だったなんてね—

—普段無口で気取って鞭振るってた癖に、自分から股
開いて鞭待ってるなんて、変態以下の豚よ—

回りのギャラリィから様々な嘲りが聴こえてくる。



「ライカ、皆様に貴女の痴態を告白してあげなさい」
ライカは今から行う告白に激しい羞恥と興奮を感じて
いた。息を荒げながらも一声の出ないライカにレイナ
は「ちゃんと言えたらオナニーしていいわよ」と言わ
れて、恐る恐る、一言ずつ告白を始めた。

「わ・・・私、ライカは・・・今まで女王様を偽ってお
りましたが本当は、鞭で打たれるのが大好きな変態牝
奴隷です・・・皆様に今日の姿を見てもうのを想像し
て興奮している変態マゾ犬なんです・・・どうか今宵は
私が狂い、泣き叫ぶ姿を存分にお楽しみください」



「よくできたわね、じゃあまずは服を脱ぎなさい」
ライカは一瞬たじろぎながらもゆっくりと服を脱ぎ始める。ラバードレスを脱ぎ全裸になったライカは自分が女王様から奴隷に堕ちてしまったことを実感する。
「なーにあれ？乳首にピアスなんかつけてー
ギャラリーの声にライカは答える。
「このピアスは・・レイナ女王様に一ヶ月間調教された後付けて頂いたものです、ど、奴隷の証として・・」
「あら、それじゃ二度と女王様の立場には戻れないわね、お気の毒に・・ふふっ」



「皆様に貴女の裸をよく見てもらったかしら？では次に貴女を奴隷に相応しい姿にしてあげる・・・」
レイナは一着のボンテージとトゲ付きの首輪を手渡す。
それを着たライカは真っ赤になりながら息を荒げる。
—わぁ、いやらしい格好・・・変態にはお似合いね—
—あんなに興奮しちゃってそんなに嬉しいのかしら—
ライカは回りから聴こえる蔑みの言葉にさえ興奮を覚え、女王様の次の命令を待ちきれずもじもじと腰を揺らし始めた。
「盛りのついた雌犬ね・・・いいわ、オナニーなさい。
浅ましく自分のマンコを慰める姿をお見せしなさい」



「は、はい・ありがとうございますレイナ様、んっ」
許可を貰ったライカは待ってたとばかりにポンテージ
のチャックを下ろして秘部を両指で乱暴に擦りだす。
水音が響き始め、指の動きはさらにヒートアップする。
「あっ、くっ・っ！すこい・頭が、頭がボーっとし
てきて、でも凄く興奮していて・んあっ」
「あんなに激しく腰くねらせちゃって、ボールもある
しストリップダンサーに転職した方がいいんじゃない」
「あは、確かに露出狂のライカにはピッタリね」
指の動きはどんどん加速し遂に絶頂を迎える。
「ああ、イク！イクます！見られながらイクます！」



ビシイイイ!

「あっ・・・ぐっ、おお・・・い、イぐう・・・!!」

ピュっ、ピュ・・・ビクンビクン

—あ あ、派手にイッちゃって、潮まで吹いてるよー
オナニーに夢中になっていたライカの不意を突く形で
振り下ろされた鞭の一撃は、彼女の意識が飛びそうに
なる程の高いオルガズムに達しさせていた。

「誰がイッていいなんて言ったの？ 奴隷がイク時は必
ず私の許可を貰わないと駄目でしょう・・・？」

これはもっとキツいお仕置きをしないと駄目ねえ・・・」

「はあ、はあ・・・もっと、キツいお仕置き・・・!」



「次は・・・貴女の好きなこれを付けなさい」

取り付けられたのは開口器、舌クリップ、鼻フック。どれもライカの顔を歪め、醜く見せるための道具だ。

「ふふ、皆様この奴隷は外観的に辱められるのに酷く興奮するんです、前にこの姿で公園に縛り上げた時は一日ずっと涙と汗と涎に塗れながらイッてたんですよ」
笑いながらレイナは鞭を両手にライカの正面へ立つ。

「口上を述べなさい。」

「わらひは・・・レイナひやまの変態牝奴隷れす・・・
どうか、浅まひいわたひの身体に鞭の傷跡を刻みつけ
れくらさい！もっと、酷いことしてくらさい！」



ビュン、ビシイイ！バシイン！

「おおおおお！ひゅごい、ひゅごいれす！痛い！
痛いいあああ！うわあああああ！」

たて続けに襲う鞭の風にライカの太腿は真っ赤に腫れ
あがり、愛液が洪水のように溢れ出し、顔は涙と汗と
涎とでぐちゃぐちゃになりながら泣き叫ぶ。

—うわ・流石にこれはちよつとキモイわね—

—私でもあんなにはなりたくないよ、ねえ可憐？—

—そうね、少し下品。本人は嬉しいんでしょうけど—
ホールではこれまでにないくらい蔑みの言葉が、ラ
イカの絶叫と共に聴こえてくる。



「さあ仕上げよ！股を思いっきり広げなさい！」
蠟燭を鞭痕に振りまくと反射的にガクガクと足を震わせながら股を大きく広げる。
「いい？鞭だけでイクのよ？鞭で叩かれて潮吹きながら絶頂を迎えなさい！」
ビシイン！ビシイン！
「おおー！イふう、鞭だけでイきまふー！イふッイふッ
うああああああああ、イふうううう！」
大股を開いた状態でマンコを何度も鞭で叩かれたライカは2度目の潮を吹きながらの絶頂を迎えた。
この一部始終の映像は後に裏サイトで公開された…。



「はあ、はあ・・・あ・・・駄目、出ちゃう・・・！」
メインショーが終わり、開口器を外したライカの腹からギョルギョルと異音が鳴った。

「皆様、本日は私、レイナの調教ショーをご覧頂きありがとうございます。最後の見せ物となりますのが一週間溜め込んだ隷隷ライカの脱糞ショーとなります。どうか最後までお楽しみくださいませ・・・フフ」

「ああ、いや、見ないで、くだ・・・ああああ・・・！」
ライトアップで照らされた中で、我慢の限界を迎えたライカは遂にその場で漏らし始めた。大きな塊を次々に産み落とすライカは3回目の絶頂を迎えていた。

































初調教お披露目。
ライカのぶ子と佐江
戸惑う様子ながら二人とも
濡れ濡れで準備万端！



実は……？

二人は大学の元先輩後輩で
交際関係でもあったらしい。
のぶ子が指定したの。

恍惚顔

すまし顔してたのぶ子に
電マのお仕置き。
1回目こそ抵抗してたが
3回目には牝の顔に。

寂しそうな佐
のぶ子ばかり責め
切なそうな佐江。
もう少しガマン！

電マ絶頂。

まずは二人の好きなコレ。
見せるだけで息を荒ける。
どちらにしようかな



のぶ子絶叫。

初めての浣腸に許しを請う。
ゾクゾクする。もっと酷い
ことをしたらどんな顔をする
だろう。

口枷姿。

開口具を付けるとすすり
泣きながらも落ち着いた。
まるでおしゃぶりのようだ。
さらに浣腸液を追加。



歪な愛撫

手も足も口も拘束されて
お互いの舌を舐め回し合う。
あんなにか幸せそうに

脱糞。

最後に二人同時に脱糞。
異臭が部屋に漂うが、それ
さえ興奮してるようだった。



明けまして

2013年

おめでとーございます。

ドウム
参式





























2018
戌

DOMO3







ユウウツ
- 憂鬱なライカ -

幼馴染奴隷とアンニュイ女王様の退廃的生活記録









…ライカさん
準備はもう
できています

あっ…

その…よろしく
お願いします



ハリアップ、ハリアップ！
ライカ君、急いで、急いで
もうすぐ時間だよ！

だるい…

お客さんを待たせ
ちゃダメ！





.....っ



あっ.....んっ

好、き.....
のんちゃ.....



何が嫌
なのですか？

あひえ、
らめっ.....

乳首もこんな
に勃って.....
いやらしい子



.....いいでしょう
でしたら貴方には
罰を与えます



鞭打ちだけで
イキなさい。
それで今の粗相は
帳消しとします

なぜ、私と紗江は
こうなったのだろう

はい.....
ありがとうございます



.....申し訳ございません
卑しい奴隷の身を弁えない
不適切な.....発言でした

もう二度とこのような
粗相は致しませんよう
きつい罰をお与え下さい

あとから聞いた話によると、紗江は結婚してすぐに夫を亡くしていた

夫が残した借金と息子の学費を稼ぐために、彼女はこのクラブに斡旋されたらしい



紗江と再会できた事はたまらなく嬉しかった

しかし同時に、親友を調教することに強い罪悪感を感じながら今日も紗江を執拗に痛ぶっている



配信終了、
…お疲れ様

あるいは、私は彼女をこの
手で畜生に墮とすことに
興奮を覚えているのかもしれない

現に罪悪感には日に増して
薄れていき、徐々に征服感
を感じているのだ

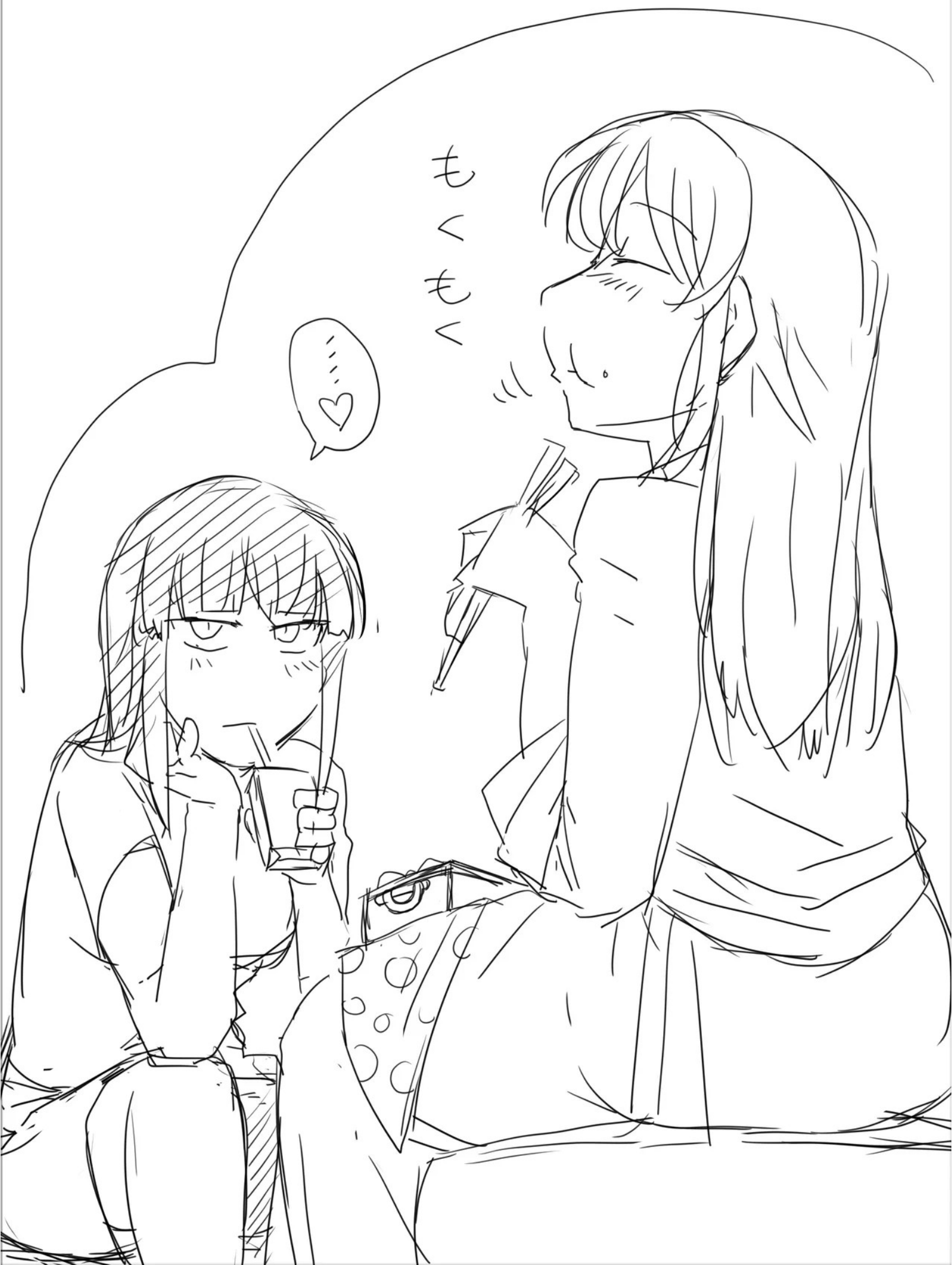
…それでも、私は彼女を
手放したくない

んふんっ…

んふんふ…

…少し休憩しましょう

んんっ…



- 2 -

憂鬱なライカ







思ったより少ない...?
でも、少し苦しいかも

あの、この後は...

一度、自宅に
戻って頂きます

ええっ！

...浣腸は正直余り
好きではないですが

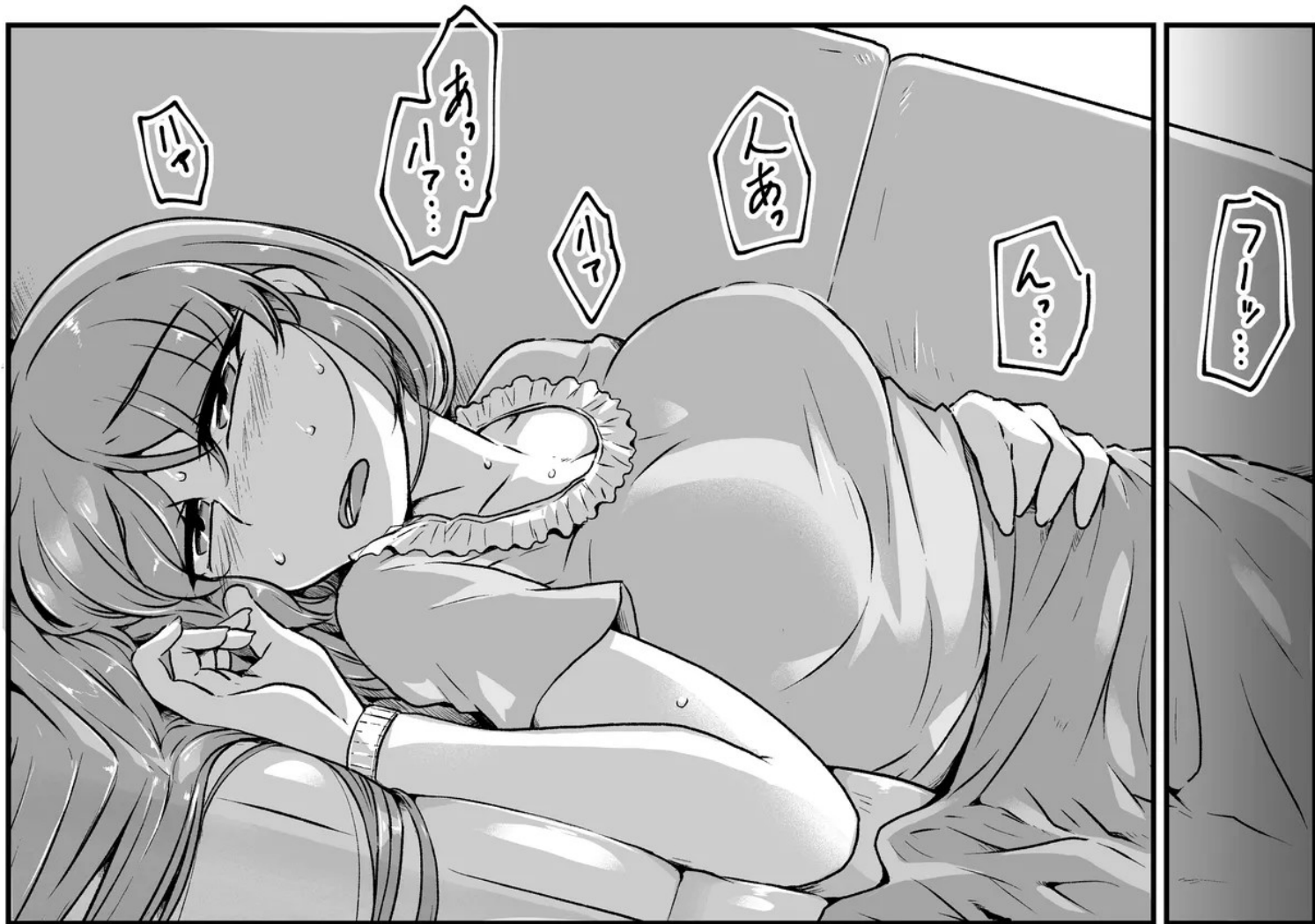
いいでしょう
あなたの望みです
存分に味わいなさい

フー...
フー...

おっ♡

おっ♡

ズ
ズ
ズ
ズ...



あつ、あつ、ああつ
んああつ！

痛い……

いたあい……

くるし……

いい、苦しくて
切ないよお……

ハッ

ハッ

ハッ

くちゅ

くちゅ

ハッ

誰か……
だれか……
苦しいの……

だん

濡れて……
いやあ……
我慢、できない

ギッ

ギッギッ





うあああああ
出る、出ます！

出るっ出る
あああああ

……..
意外といいかも

その日から、佐江の調教に
浣腸が入るようになった

ああっ……っ

……っ、あっ……
いっ……

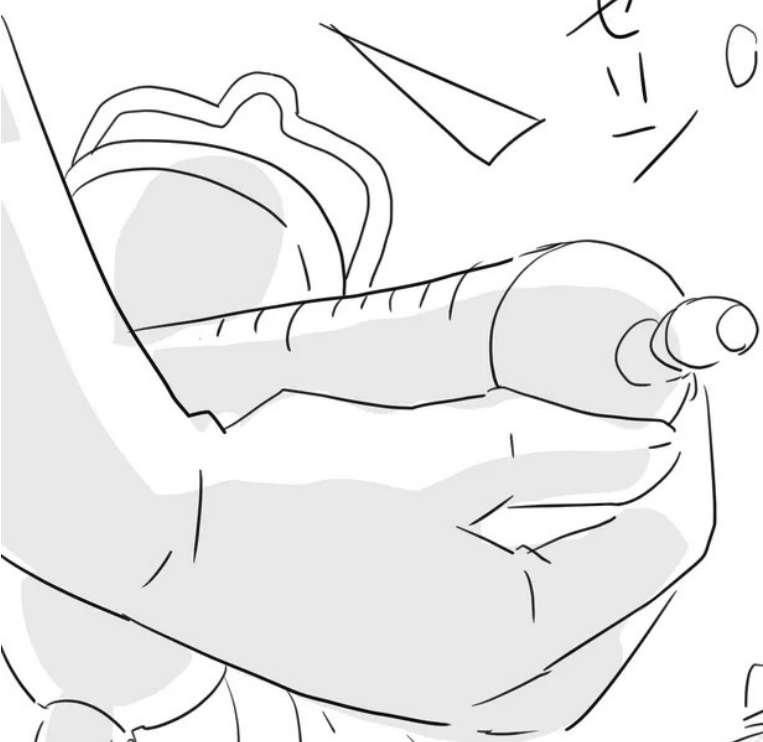
ビキ
ビキ



ズッ

佐江くん
次はこれで
完腸

ドキ
ドキ





「…フウー、フウー…
んっ…オツ…」

ガチャ
カツ、カツ、カツ、カツ…
「んっ…あっ
……………」





ズブズブツッー!

「オウあ!?
イツ…痛ツ…ひー!」

ズツ、ズツ、ズツ、ズツ

「んおおっ!おあっ!
オツ、あっあっああ!」



ぱあん！

「嫌あ！おひり、んあつ
おひりっ……！」

ぱあん！ぱあん！

「ひゃん！んおあ！
……ゆ、ゆるひ、れえ……」



「アああっ!やああ!
んあああ!」

「.....」

「やつ、やあああ!
オッ、ああっ、んはあ!
んおおおーっ!」



「・・・この変態。
こんなことされて濡らして
恥ずかしくないの?」
「ひやあああ! ああっ
おほっ、おっ、おああ!」

ーパシ、パシ、パシッ
「オッ、オッ、おほッ、
やつ、あつ、んおおっ……!」

「啼きなさい、獣の様な
悲鳴をあげながら」

パンツ！パンツ！パンツ！

「あつ、あつ、アツ！
やら、やらつ、や……
イつく、いふつ、いふう……」



「ンオツ……!
んおおおおおー!」

ビクツ!ビクツ!ビクツ……

「おっ、おおっ……はあ……
んはあ……んっ」



「・・・お疲れ様です。
少し乱暴過ぎましたか？」

「ぶ、はぁ・・・けほっ
ううん、大丈夫・・・です。
ありがとうございました」

「・・・そうですか。
それならよかったです。」





























